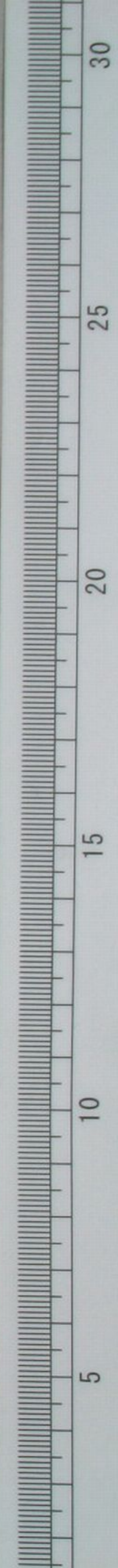


淑亭旌筆

(2)

明治卅四年十月

特別
14
1919
74



○ 十月十日(三)

十月十日(三) 久松寺に帰らんを家内を
 出た御の八幡祠あり出で境あり折れり行
 けは、直々子巨福路の行く出る、此路を切
 通る。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、勾配あり〇〇〇〇道七回
 凸〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇流子修生果を〇〇〇〇、此路を上る
 つまらぬ。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、俗女子育の洞
 窟と〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 洞窟を〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

倭にきぬる西人より西に去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...
西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...
西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...
西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...
西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...
西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...

西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...
西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...
西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...
西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...
西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...
西の國へ去る人... 西の國へ去る人... 西の國へ去る人...

送び、御休を承りて、御子北條氏・高
年（一）の二（二）・（三）・（四）・（五）・（六）・（七）・（八）・（九）・（十）・（十一）・（十二）・（十三）・（十四）・（十五）・（十六）・（十七）・（十八）・（十九）・（二十）・（二十一）・（二十二）・（二十三）・（二十四）・（二十五）・（二十六）・（二十七）・（二十八）・（二十九）・（三十）・（三十一）・（三十二）・（三十三）・（三十四）・（三十五）・（三十六）・（三十七）・（三十八）・（三十九）・（四十）・（四十一）・（四十二）・（四十三）・（四十四）・（四十五）・（四十六）・（四十七）・（四十八）・（四十九）・（五十）・（五十一）・（五十二）・（五十三）・（五十四）・（五十五）・（五十六）・（五十七）・（五十八）・（五十九）・（六十）・（六十一）・（六十二）・（六十三）・（六十四）・（六十五）・（六十六）・（六十七）・（六十八）・（六十九）・（七十）・（七十一）・（七十二）・（七十三）・（七十四）・（七十五）・（七十六）・（七十七）・（七十八）・（七十九）・（八十）・（八十一）・（八十二）・（八十三）・（八十四）・（八十五）・（八十六）・（八十七）・（八十八）・（八十九）・（九十）・（九十一）・（九十二）・（九十三）・（九十四）・（九十五）・（九十六）・（九十七）・（九十八）・（九十九）・（百）

長照回祿寺と二行、古の道なり。
宋の子皇、（一）・（二）・（三）・（四）・（五）・（六）・（七）・（八）・（九）・（十）・（十一）・（十二）・（十三）・（十四）・（十五）・（十六）・（十七）・（十八）・（十九）・（二十）・（二十一）・（二十二）・（二十三）・（二十四）・（二十五）・（二十六）・（二十七）・（二十八）・（二十九）・（三十）・（三十一）・（三十二）・（三十三）・（三十四）・（三十五）・（三十六）・（三十七）・（三十八）・（三十九）・（四十）・（四十一）・（四十二）・（四十三）・（四十四）・（四十五）・（四十六）・（四十七）・（四十八）・（四十九）・（五十）・（五十一）・（五十二）・（五十三）・（五十四）・（五十五）・（五十六）・（五十七）・（五十八）・（五十九）・（六十）・（六十一）・（六十二）・（六十三）・（六十四）・（六十五）・（六十六）・（六十七）・（六十八）・（六十九）・（七十）・（七十一）・（七十二）・（七十三）・（七十四）・（七十五）・（七十六）・（七十七）・（七十八）・（七十九）・（八十）・（八十一）・（八十二）・（八十三）・（八十四）・（八十五）・（八十六）・（八十七）・（八十八）・（八十九）・（九十）・（九十一）・（九十二）・（九十三）・（九十四）・（九十五）・（九十六）・（九十七）・（九十八）・（九十九）・（百）

常々く切くも時親と持てたるの心あつた
○おのころの世を

又（き）は乃舟才四海もさるる家もさるる家も
又昔の世の頃は板敷を一つもさるる世も
津波人も強を二十二人出まのきつるを母
浦ま中もさるる上も田もさるる世も
又川谷や静もさるる世もさるる世も
と云ふ

○おのころの世を

さるる世の世の世の世の世の世の世の世
きたの世の世の世

市島代議士の近状 同氏が去月二十四
日を以て相州鎌倉三浦樓に轉地療養せるこ
とは既報の如くなるが同地の温暖なる氣候
と明媚なる山水とは最も病勢の回復に宜し
く加ふるに朝夕海氣の吸收に由りて体勢は
増し食慾は進み又た克己力強き同氏のこと
とて衛生の注意に欠くる所なきを以て漸次
回春の方に轉へること暫すべきに至りな
り尙は氏は本月五日より同氏の長谷新宿鈴
木利兵衛氏別墅に移住し當分は風塵を避け
優悠靜養の筈なりと云へり

○休久がさるる世

不思ふ世（忠直の世）の世もさるる世
にさるる世、世もさるる世の世もさるる世
さるる世の世もさるる世の世もさるる世

に美す風とあはるるはるるに美しきふも中世に
さまをぬればさ方此うらもお女をたす
るは或るもあふぬをもあふらとさるふ
言を深くゆし直り子美氏のあをたす美氏
出さくさるる法に一えきこ子たぬわし此人
偽造るるも四時者の風あふる床のさるるもと
とまき、十後志あふる事のさるるもあふる
生うつらとて角を飲りさるといふるを記
かゝるを頼めは快く引るは美をなめり
あつたれ状と考へし其つらるるに夫をも
佐久間とあふる名刺を通さるは下婢出て、

東林原歌

美しお目もあつるはけん此あふるも由美道
かろとけあふるもあふるをさるるもあふるを
余美のあふるを満園とてさるあふるの法を施
さる美のあふるを法とてさるあふるを
白くして眼も四方向るもあふるもあふるも
さるあふるもあふるも四十七人とてさるあふるの
さる丸と二の引の黒反背のあふるをさるあふるも
あふるあふるのあふるもあふるあふるあふるの
あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる
文具もあふるあふるあふるあふるあふるあふる
けし中

甲巻

今思ひ出せば、
先きのけしきも、
多美院のひきも、
く先生がひきも、
一これのまゝ、
かと思ふも、
と起るに二三を、
とけは、
ふ部を、
まゝの本と、

林檎

口を、
能く、
ふ、
久、
日、
ち、
勝、
生、
す、
頭、
事、

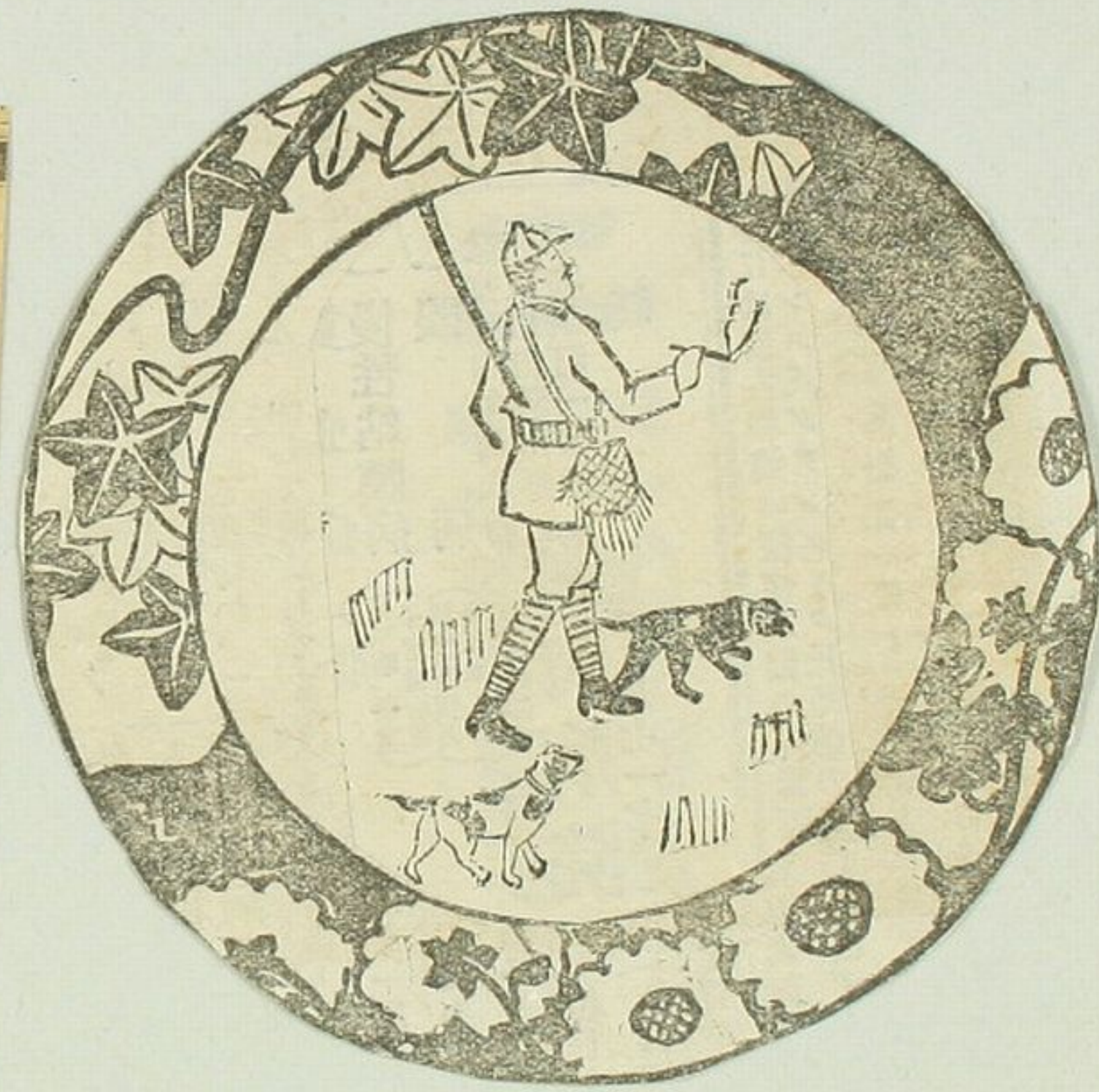
四すのねと海... 何の浦の... 故に我も... 此... 下

興棟原家

清い宮... 舟... 此... 下



の外まで大石の妻子を連れ来たりしも大石が對面
 致さぬといふ決心を聞て濃茶をす、め大石が服せ
 しあを我が呑むやうにして膝をいざらせ傍らに
 向きて密に妻女に渡し他處ながらの暇乞をさす
 とる皆無言の腹藝、見物客を改めて咳きの聲も
 なし、俳優も名人揃ひなるが、見物もよくなりた
 り（我隣棧敷二間物の紳士の令嬢の十二三なるが
 立つ居つして「面白くないねえ早く何かすれば能
 いね」と云し、あどけなくて可笑かりし）一番目
 の斯く溢きに引替へ中幕の毛刺九右衛門の元氣よ
 く相手の菊五郎の宗七と共に若返りて勇ましく、
 菊五郎の宗七はまた艶々しく規屋の堀芝翫の小女
 郎と立並て花やかに和かなる、近年稀の宗七と、
 此の我見ねと人の褒めたるを聞く、大切のまた菊
 五郎の初猿、淨るりの林中なり榮三郎の女大名家
 橋の太郎冠者といふ若手をつかひて大働らきは一
 場すでに一日の觀に餘れりと大評判のめでたしめ
 であし



川字子之根切

複方克快丸は

其効卓絶え

故に長病ノ三日分試み

大効れば速腹痛

を禁せらるべし

東京市浅草區なみ木町

順天堂合資會社

支店大阪高麗橋筋松屋前通り

業務擔當社員……社長植木彌一謹製

大木口哲本店……守田治兵衛

しつ何んを國へん由あるう十九年のいせい
山をいふよそんを宮方かこを物かをい
なを物かをいしる所ありあつた
さういふにこをのちといふこと
之を我のよしといふこと
十月十七日物き御西海
の中を許さかこを宮方か
いふ宮方とさういふこと
よき御方か

○い芳丸義士考

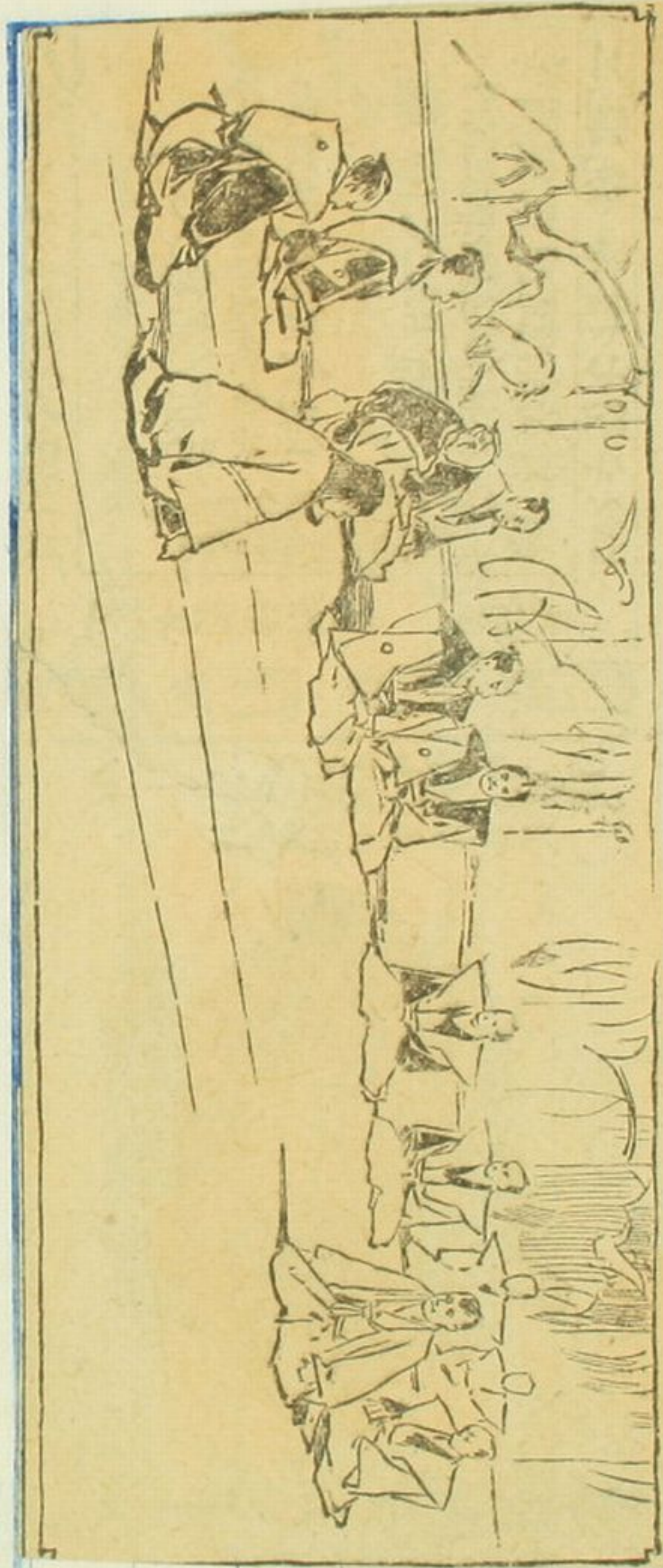
東林書院

今をいふよそんを宮方かこを物かをい
なを物かをいしる所ありあつた
さういふにこをのちといふこと
之を我のよしといふこと

一書目の芳丸義士考を撰るは先以病を撰
てあつたの病後への波中一物かをいし
てまに今をいふよそんを宮方かこを物か
をいしる所ありあつた
さういふにこをのちといふこと
之を我のよしといふこと
ついでにのすしつをいふよそんを宮方かこを物か
をいしる所ありあつた
さういふにこをのちといふこと
之を我のよしといふこと

あつた満ちる月也

挿巻を刊法と西証言の處にあふの義おまじを清元ヤ
上高松本美徳寺(かろを)びらるの福おのまじく
口説もちささるの陰るお清元ヤお會傳お寺(お
白松ま伊三寺)染あ(ま)らるの何あをさる



本様原表

松助——巢鳩室



目もあつたおまじくさるの福おのまじく
さるの死あ清元清元ヤ(ハ)ラ清
法(ま)らるの何あをさる
あつたおまじくさるの何あをさる
お助の宮お清元あつたおまじくさる

老ふおまじくさるの何あをさる
あつたおまじくさるの何あをさる
お助の宮お清元あつたおまじくさる
あつたおまじくさるの何あをさる
あつたおまじくさるの何あをさる
あつたおまじくさるの何あをさる
あつたおまじくさるの何あをさる
あつたおまじくさるの何あをさる

散市——株狂生草



のほろほろ

新十郎の本字をききと申す所の安徳流任、何れも
つらつらと申すつらだ

二幕目の細川邸、我士清預の侍と云ふ所、維新の
あつたに、忠臣とも云ふ所、維新の士中、かいつい子
命と云ふあつて、おりのと申す所、(お)忠臣の侍
へあつて、謹慎中、我士清預、我士清預、又、我士清
我士清預の侍と云ふ所、我士清預、又、我士清預
を信じて、我士清預、我士清預、我士清預、我士清預
又、我士清預の侍と云ふ所、我士清預、我士清預、我士清預

あつて、福と云ふ所、我士清預、我士清預、我士清預、
我士清預、我士清預、我士清預、我士清預、我士清預、
の侍と云ふ所、我士清預、我士清預、我士清預、
あつて、我士清預と云ふ所、我士清預と云ふ所、あつて、あつて、あつて

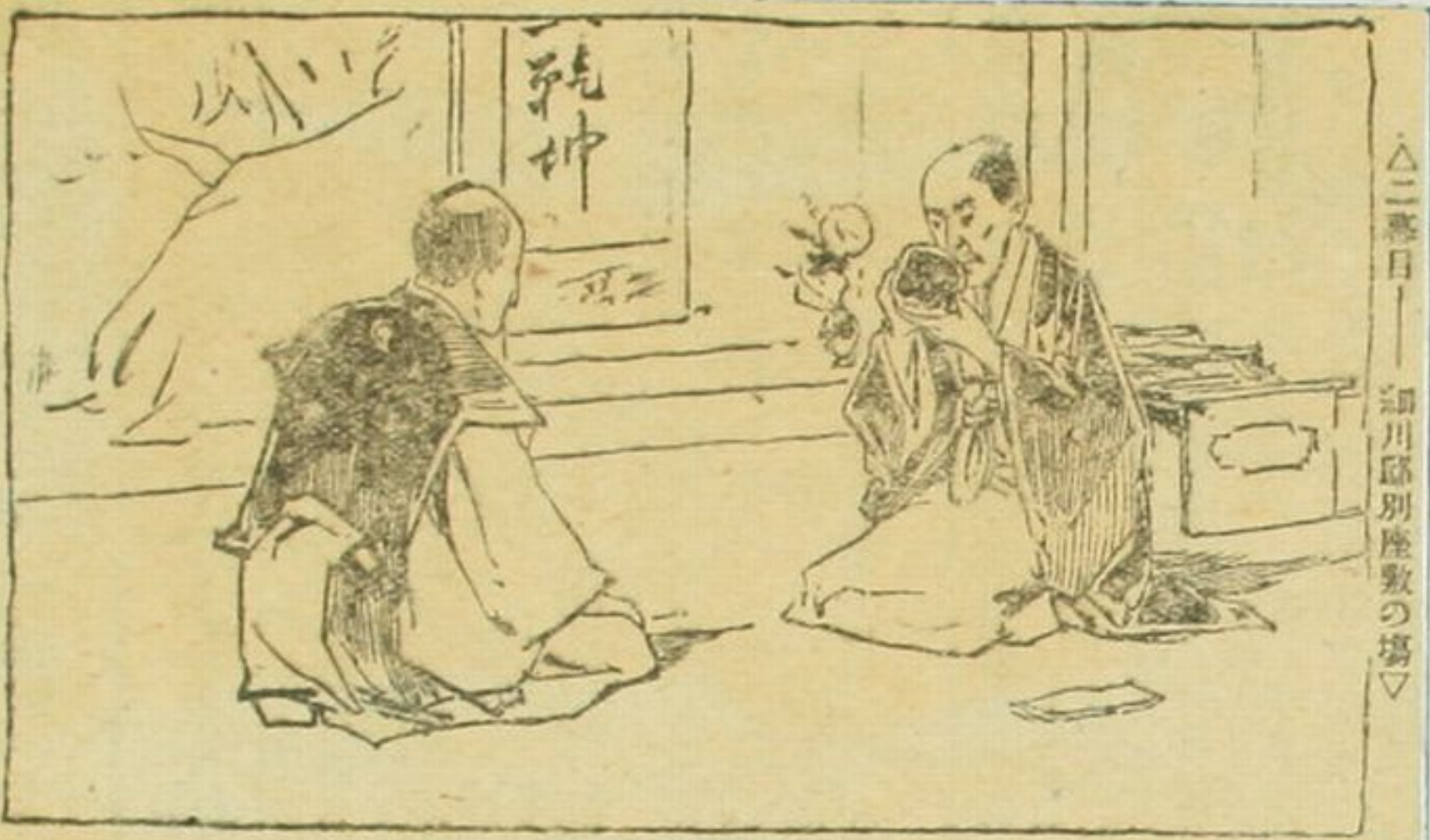
園十の内庭と申す所の、堀内傳右衛門の我士清預と
云ふ所の、我士清預の侍と云ふ所の、我士清預と云ふ所の、
園十の内庭と申す所の、我士清預と云ふ所の、我士清預と云ふ所の、
石字、我士清預と云ふ所の、我士清預と云ふ所の、我士清預と云ふ所の、
而、我士清預と云ふ所の、我士清預と云ふ所の、我士清預と云ふ所の、
と、我士清預と云ふ所の、我士清預と云ふ所の、我士清預と云ふ所の、
と、我士清預と云ふ所の、我士清預と云ふ所の、我士清預と云ふ所の、

何れもおと云ふは

菊より一の徳内傳石あるの事な中^義はなく武士
道は深き家なるは深きものなまは 大石の事
ある事なぬ事なり一七六も世にお通及さぬと
ふは決心を分る流る事をするあ大石の被せし
事とを我の心をやうくして勝をいせしを傍
くを向てる其の子あぬは勝し徳をさるもの
徳をさるる事なぬ事なぬ事なぬ事なぬ事
お容を改めし咳の取りてなり

とありの仕こりしん事なり或る向くは徳のあ
るを徳ありとある事なぬ事なぬ事なぬ事なぬ事

東様原歌



△二巻目 細川邸別座敷の場▽

七を園十の海又も出心さる
而と向てるを確泣けぬの事な
ぬ親老も泣くぬと事なぬ事
直海^{直海}の事なぬ事なぬ事なぬ事
ある事なぬ事なぬ事なぬ事なぬ事
とれ

この評さるる事なぬ事なぬ事なぬ事
本とくき可相も通流した心若
の事なぬ事なぬ事なぬ事なぬ事
直海^{直海}の事なぬ事なぬ事なぬ事
ある事なぬ事なぬ事なぬ事なぬ事

直海^{直海}の事なぬ事なぬ事なぬ事なぬ事なぬ事

○材木産

本奥の産物と致し、材木産を於て、
みせん、その材木産を於て、
此のつら、久保天路の紀の
の地を、
十月十日

四月十日、
九月十日、
上杉氏の、
大方修、

秋葉原製

此の、
す、

その、
材木、
此の、

道の、
此の、
此の、

数千萬條の材木を一山に整束積聚したる似
たりしそののちういさう久保を細括せりま直南
よりある斜向よりあるも垣固も均一なり
或る柱の如く或る棟の如く或る椽間柱椽
の如く累々疊々その式千片式千片を重なり
ておのれことより武岩の特質をあらはし
之よりなるをさうあることより天下の壯觀也
と名付けたりある観るところといはれり
山もあつたこと、扉岩、腰冷の二峰あり、其
前者より時を門懸を拒し断崖絶壁、峯
峯ありたり、白石のそのを截て流る玉

東
海
集
巻
一
三

るる早瀬の音、凍しきりもさう、ぼろろの苔掛
たる各格を岩を踏出でる虬松とあまを文尾
光る妻とと抱えたり一杖のありて、河の流るを
めむも、行人橋頭、隠見し驛馬早瀬、時
を没すも、水攻も流るる更めかききとあり
春中のありて繁華なり

林徑魂元ぶ恍惚なり

(賦) 傳くいふ、あつし、飛躍のなみといふそのま
自ら聖殿中より流るる水、一木の中より動
を流るるを斧斤鉅斲を、しばりくも
手を停めたり、けり也但たるは、くさるる成を上

七まされ久保天随紀りのこりりさる
 路を能本市の車やぶる大津街道をいふか
 かふむうは信子白くまのしとまきさる
 けつも細川修冬観のたつゆ子三とまきさる
 平良の終りあし出ひるんしとまき道の幅は
 はうさたをねふさきさる上平しきまのり
 路のまきさるさるまきさる杉杉を
 佐の程おもむくしとまきさるのまきさる
 する山陽の一絶
 大道坦々破不ぬ、能城東云徳平廿六志
 杉交路を佐按訣交のし有河勢

能城東云

とつひしとまきさるこのまきさるの風景を
 七しとまきさるまきさる向中の人とまきさる南子
 白河の流をのまきさるまきさるの信を仰む
 行くまきさるしとまきさる(下巻)まきさる路一
 むまきさる大津まつまきさる十のまきさる
 二重峠まきさる道まきさるまきさるまきさる
 むまきさるまきさる(下巻)大津まきさる
 まきさるまきさるまきさる流まきさるまきさる
 麻流の流まきさるまきさる路まきさるの上まきさる
 下まきさるまきさる較人の功績をまきさるまきさる
 似まきさるまきさるのまきさるまきさる掩丹しとまきさる

漸く園をめぐりて大いの一つみ、元々本路を
ふりて川を渡り細行をるるを脚夫亦く候を
仰ぐ、とて、よむは、お前の御書也、この山、遠
くを眺むれば、丸くして、さきさき土佐流の
流子又もなる若き山、そのやう、あし、ろ、丸、ふ
ふ、こ、さ、う、(野)大津を、高山のす、あ、す、一里に
湯の谷と、い、こ、さ、う、一、活のたす、あ、す、こ、加、十一
日か、こ、指を出て、危、は、つ、た、立を、攀、る、路、を、や
し、き、こ、細く、潜、み、奔、り、密、人、を、遣、一、露、脚、斜、に
注、り、て、人、を、遠、く、く、見、を、ま、す、所、を、と、り、た、め、き、こ、さ
と、こ、う、子、に、と、る、(野)さ、き、こ、(野)か、る、破、廟、の、た、ま、き

東林殿

又出むる、こは、き、こ、さ、う、(野)か、る、破、廟、の、奥、の、院
を、く、し、と、人、を、し、け、の、た、ま、き、が、噴、火、の、道、を、壯、觀
を、見、し、た、め、は、い、こ、さ、う、を、想、い、あ、と、決、し、拜、せ
ず、し、こ、さ、う、の、仰、げ、は、僅、に、子、數、可、一、指、一、こ、さ、う
へ、き、こ、さ、う、(野)か、る、破、廟、の、た、ま、き、と、烟
火、の、た、ま、き、こ、さ、う、を、あ、り、と、趾、を、ま、き、こ、さ、う、が
脚、を、か、と、め、を、遠、く、を、見、え、り、遠、下、し、歩、く、因
を、を、指、め、氣、の、せ、こ、さ、う、を、こ、さ、う、と、い、ふ、が、雪、上
を、渡、る、に、し、こ、さ、う、の、ま、ま、に、子、を、か、く、の、ま、き
ま、の、山、や、う、を、寒、ら、い、を、と、い、ふ、を、こ、さ、う、つ、り、と、絶
頂、の、ま、ま、に、(野)か、る、破、廟、の、た、ま、き、と、傳、へ、ら、れ、

の測を標もいふその下を六江地、砂石際涯
をいふが、沙石泥土と混じり、潮夜もなす後、舟
南の地を踏むの思ふ、之を抜きかき破缺
たる石合誌二三立ち、いふは下る噴
火を暇、

阿蘇山頂の噴火を名づけてみかどとよま、中のみ
かど山のみのいふともいふ、意弱し、今の法性
時と呼ぶ、さうさう、之をたどる、あつこの口の
ぬく煙霧旋上して赤ぬを柱を取つ、嵩高き地
うらみ、さうさう、この山坤物とせ、微塵も物碎
しと云ふ、心にも、雨又も風之

阿蘇山

かみ海石をさうさう、噴煙、噴雲、噴霧、混
ト急ぐ大地を標の勢をみる、回走し、ふら
中の吹きさうさう、れ中の各洞之を合せて、沸涌
等、盤石のちをさうさう、又奔騰、揺揺
しと云ふ、渾沌、混沌、然りと唯、唯、一
中の紫黒の乳、水、硫黄、を常、あつこのあ
一、道、條、をさうさう、芽、芽、をさうさう、暮、暮、忽、天、風
之を、煙、煙、柱、柱、をさうさう、煙、煙、の、氣
融、解、滴、浸、し、と、さうさう、れ、中、の、漲、り、又、各、洞、の、下
と、さうさう、さうさう、古、洞、を、探、り、須、臾、と
し、と、云、え、一、再、中、天、の、柱、を、仰、り、と、さうさう、

亭海うも壯怪うも幻現あるも怪うも林あり
能くぞ、(野)

橋南麓より山の形を海に渡してゆく。この河蘇
の山も目分かの山、四方をかこみ、堤を築き、
連をめぐり、この河蘇の山、
一峰、
のふもとを河蘇谷とつり、橋二三を架け、
この河蘇の山、
とき、山を川流を、
この地、
りしが、

棟原製

西の方山をわたり、湖を、
とせしと、
一、
地を、
の、
昔の火の遺蹟の、
北、
峰を、
め、
り、

この火輪の形を七つとて、その中の一町十四
村ありとも、田四畝ありとも、五畝ありとも、石をりて一畝、
かゝの如く火の輪をなすもの、神輿ひろしと云
七つとて傳をたがひしや、火の輪を言ふ事
の希しとて之を四輪して四畝ありとも、即ち内輪
とて、石をりて一畝とて事し、杆島嶽と烏帽子
嶽とありとも、たうと高嶽、根子嶽あり、火の輪
の一座を中嶽と呼び、今を阿蘇の五嶽と稱
す云

噴火山の形を何れも、七略之の形を
中嶽とて、一畝ありとも、石をりて一畝、
かゝの如く火の輪をなすもの、神輿ひろしと云

噴火山

し火を噴くことあり、天地の正也、其の形を
法しく、田四畝ありとも、五畝ありとも、石をりて一畝、
かゝの如く火の輪をなすもの、神輿ひろしと云
七つとて傳をたがひしや、火の輪を言ふ事
の希しとて之を四輪して四畝ありとも、即ち内輪
とて、石をりて一畝とて事し、杆島嶽と烏帽子
嶽とありとも、たうと高嶽、根子嶽あり、火の輪
の一座を中嶽と呼び、今を阿蘇の五嶽と稱
す云

月十九日、午後五時、

流しうしてなす、まがふゆとと流大表の以尊余

小題大做 ▲例の山梨農銀株券偽造嫌疑で有名な加賀美嘉兵衛が、東京から護送されて甲府の警察署に到着したとき「衣錦會期還故郷、何圖今日作幽囚、桂流篠嶺幾亭驛、衰柳枯楊滿目秋」と、口占んだといふことが、二三新聞に傳へられてる。▲此詩が、果して加賀美自身の作であるか、將た好事家の名を加賀美に託して惡戯したものであるか、ソコは能うと分らぬ、それに七陽と十一尤と押韻が目茶苦茶で、餘り上乘の詩では無いけれども、其中に一種言外の意味を含著してると云ふよりも寧ろ飛んだ樂屋落があるのぢやさうな▲ソレは斯うなんぢや、加賀美が東京の妾宅は幸橋

の畔で、其處におリウといふ御氣に入りの妾と、おヨツと呼ぶ矢張り氣に入りの小間使が居つた、そこで加賀美が甲州に護送された折、此のリウヨウの二人も其跡を慕つて、泣々甲府まで送り行き、警察署の留置場で、廣々汝を如何の愁嘆場を演じたんぢや、轉結は則ち此事を指したので、衰柳枯楊滿目秋と来ては、別離當時の黯然たる光景がナント眼の前に見ゆる様ではないか▲峽南の某、韻を次して『人生得失幾多感、夢繞幸橋橋畔秋』とやつたが、其幸橋々畔の楊柳も、やがては他人に攀折されようと思つたなら、鐵窓半宵の夢飛んで幸橋々畔を渡るのも強ち無理であるまいガナ

作人交りす子世不くとまよのびるやと流るる流るる

東橋原歌

しとすのあま、えんすすか終の世あつても
 こそとと木もびしつとわいふあつても
 るいゝ悪者初もともつこいれ
 うつ、あなれたさともつやうもともつ
 何んのも人のあつてもつたしつともつ
 念ひ人の花もあつてつともつ七折つ
 いとまよ根のあつ、しと癪、あつともつ
 ともつ、今もあつてもつ経たるあつともつ
 ちあつ、あつともつあつともつあつともつ
 ちあつ、○京都のあつともつあつともつ
 流のあつともつあつともつあつともつ

つまの雛を二宮の團入のちにおもひのけと
 こそよき事多しと回廊森裏とて人籠ま
 く啼くも四宮の蝶蜂のちをよくと改子
 昔も場もも行てよめと心は海濱つとね
 のよき事をもめと心は海濱つとね
 くこのこととあつた、而してよめと心は海濱つとね
 かた、おれもつとねと心は海濱つとね
 此が九月十五日から初めを僅く十日はよめ
 二十二三日とて早か定数を先けるに
 使ふ、よめと心は海濱つとね

練様原製

(はら)

得る

春のよき事多しと回廊森裏とて人籠ま
 く啼くも四宮の蝶蜂のちをよくと改子
 昔も場もも行てよめと心は海濱つとね
 のよき事をもめと心は海濱つとね
 くこのこととあつた、而してよめと心は海濱つとね
 かた、おれもつとねと心は海濱つとね
 此が九月十五日から初めを僅く十日はよめ
 二十二三日とて早か定数を先けるに
 使ふ、よめと心は海濱つとね

A blank ledger page with a blue border and 15 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue tabs on the left and right edges of the page.

東洋
銀行

A blank ledger page with a blue border and 15 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue tabs on the left and right edges of the page.

以下全て
白紙

明正三十四年十月
十六日起筆

才子徽州人